平成２８年度岡崎市観光基本計画推進委員会　第１回議事録

日時：　平成 28 年 5 月 13 日（金）　10 時 00 分～12 時 00 分
場所：　岡崎市役所東庁舎 2 階　大会議室
出席委員：　12 名
高橋一夫（委員長）、齋藤眞澄、佐野幸弘、河原一夫、今川孝英、竹内博剛、西尾孝志、野村顕弘、天野裕、嶋村光世（職務代理）、神谷知秀、五反田智美
欠席委員：　長尾晴香
オブザーバー：　河村保（愛知県観光協会専務理事）、志賀爲宏（岡崎市観光協会会長）
石原嘉明（岡崎活性化本部観光推進プロデューサー）
香村尚将（岡崎市乙川リバーフロント推進課かわまちづくり担当課長）
事務局：　８名（神尾経済振興部長、観光課職員４名、(株)JTB 総合研究所３名）
傍聴者：　０名

１　開会

２　委嘱状交付式
代表として高橋委員に寺田副市長より委嘱状を交付。
任期及び欠席者について事務局から説明

３　副市長挨拶
寺田副市長挨拶。挨拶後、副市長は他の公務により退席。

４　オブザーバー、事務局スタッフ紹介

５　委員会の概要・趣旨
【事務局説明】

６　委員長・職務代理者選出
（事務局）
・岡崎市観光基本計画推進委員会設置要綱第 3 条により、本委員会の委員長を委員の皆様の互選により決定する。
（Ａ委員）
・委員長は近畿大学の高橋教授が適任と考える。

（委員全員）
・異議なし。
（事務局）
・委員長を高橋委員にお願いすることとする。また、職務代理者は委員長が指名する委員となっている。
（委員長）
・職務代理者は、嶋村委員にお願いしたい。
（委員全員）
・異議なし。
（事務局）
・嶋村委員に職務代理者をお願いする。委員長からご挨拶をいただきたい。
（委員長）
【委員長挨拶】

7　議題

（1）岡崎市観光基本計画アクションプラン（案）の概要について

（委員長）
・岡崎市観光基本計画アクションプラン（案）の概要について、事務局から説明をお願いしたい。
（事務局）
【事務局説明】
（委員長）
・今回のアクションプランは、平成 18 年に策定された観光基本計画の中の後半部分の改定であると読み取れるが、どこまでが観光基本計画に含まれるのか。
（事務局）
・基本理念は、観光基本計画に沿っているため、アクションプランでは議論の対象ではない。昨年度の調査業務により事務局内で精査した案を基に議論していただきたい。
（委員長）
・基本理念及び、5 つのテーマを導いた既存のアクションプランは前提条件とし、本委員会では、事務局で検討してきた部分に対して議論する。
・また、市長が方針として観光産業都市を掲げているが、観光産業都市をどのように捉えているのか。
（事務局）
・徳川家及び三河武士に由来する数多くの歴史資産を活かし、市の活性化と市民生活の向上を図るということである。
・その他、観光産業都市の実現に必要なキーワードとして、「美味しい食べ物」、「魅力的なお土産」、「興味を引く催し」、「岡崎ならではサービス」の４つを挙げている。
・愛知県はものづくり産業が基盤にある。しかし、人口減少時代を迎える中で新たな交

流人口の獲得・魅力の再発見が重要になるため、観光産業都市を作り上げる。
・また、観光産業都市の創造を通じて、市民にも地元の観光資源や歴史資源をしっかりと見てもらい、ふるさと愛の醸成に繋げたい。市民に愛されていなければ市外に紹介できず、おもてなしができない。

（委員長）
・東大阪市はものづくりのまちであるが、昨年から今年にかけて観光まちづくりを進めようと議論が進んでいる。主旨としては、人口減少社会の中にあって観光をどう捉えるべきかという観点から、市民の皆様方のアイデンティティをもう一度確認するというものである。
・ 委員会の議論の中でアクションプランの練り直しを図るにあたり、以上のことを基盤にし、各委員の考えをご披露いただきたい。
・ まず、Ｉ委員よりお聞かせいただきたい。
（Ｉ委員）
・課題を見せていただいた限りでは、確かにと感じるところが多い。
・東海エリアの情報誌を編集する立場として岡崎市を見た場合、観光資源が多くあり、愛知県全体としても面白い発信をしていると思っていた。
・愛知県自体が観光に対して積極的ではなかったところがあるが、岡崎市というよりも愛知県の知名度が全国的に、皆様が思っているよりも低いという認識がされていなかったのではないかと思っている。
・愛知県の中でも、岡崎市は観光に対して PR が上手い方であると思っていた。
（委員長）
・具体的に気にかけていた魅力や発信についてお聞かせいただきたい。
（Ｉ委員）
・家康や非公認のオカザえもんなどが上手いと感じていた。グルメについても、岡崎まぜめんなど民間の岡崎市に対する愛があると感じていた。
・行政がもっとアピールする体制を整えることによって、より膨らみが出るのではないかと思った。
・家康押しが日本全国で多く、浜松・静岡でも同じように「家康」と言っていたので、薄まった感じかあったのではないかと思う。

（委員長）
・今のお話を受けて、Ｇ委員はいかがか。
（Ｇ委員）
・大樹寺の受付で見ていると、実は関西地方の方は家康公にあまり興味がなく、団体に紹介しても反応が鈍い。ところが、関東の方は一生懸命お聞き下さり、質問も多い。地域の温度差を感じる。
・昨年は 400 年祭があり、浜松・静岡と合わせて盛り上げていただいた。拝観数も過去

最大であった。その中で、家康公・徳川家というだけではなく、御朱印や四国霊場巡りも流行っている。三河にも四国霊場があり、名鉄バスがプロデュースしている。１泊２日のツアーに多くの方が参加している。
・バスツアーの昼食は豊田市で済ませているようだが、それを岡崎市内でご利用いただき、神社仏閣を巡るなどしていただきたい。市内には地蔵も多く 100 周年記念事業の補助金を活用し、地蔵 36 ヵ所を復活させようとするイベントも行なっている。
・強く感じているのは、岡崎市内各地域の温度差である。観光客を呼び寄せる体制ができておらず、地域に観光客が入ることを嫌がる人もいる。
・地域の方々が情報を持って、井戸端会議で情報を広げられるような伝え方も必要になってくるのではないかと感じている。

（委員長）
・関西は「太閤さん」なので、家康公への関心が薄いようだが、関東の皆様の方の関心は高い。エリアマーケティングを重視すべきとのご指摘であると承った。
・御参拝の皆様が大樹寺を中心に色々なお店を回る波及効果の作り上げ方について、ご指摘があった。そのようなお客様をお泊めになっているのが岡崎ニューグランドホテルであると思うが、Ｅ委員はいかがか。
（Ｅ委員）
・岡崎城の近くで宿泊施設を営んでいるが、観光客は増えているものの、宿泊については少ない。岡崎を観光するために、岡崎で宿泊するというところまで結び付いていないという感触である。
・アクションプランには夜の企画も書かれているが、長く滞在し宿泊していただくためには、ホテルの客室やバスの駐車場などハード面の整備も必要になってくる。
（委員長）
・市外のお客様の飲食の状況はいかがか。
（Ｅ委員）
・団体の日帰りはあるが、1 泊 2 食の数は多くはない。

（委員長）
・宿泊よりも日帰り客の方が多いようだ。そういった観光客を輸送している名古屋鉄道のＤ委員はいかがか。
（Ｄ委員）
・現状の岡崎市の観光資源は点在している。家康ゆかりの観光だけ切り取っても、色々な場所に家康にまつわる史跡や名所旧跡があるため、アクセスに問題があると考えている。鉄道を利用いただく方もそれなりにいるが、東岡崎の駅に到着してからその先に行く手段に苦労しているように思う。
・バスは大量輸送に向いておらず、大きな課題としてはアクセスをいかに便利に、お客様の利便性をよくしていくかという整備が必要である。

・名古屋鉄道では名鉄ハイキングを実施しており、岡崎で開催すると 2 千 5 百人から 3 千人の参加がある。これは 1day イベントであり、岡崎だけでなく名鉄沿線で行なっているが、例え 1 日でも我々の商品をご活用いただきたいところである。
・岡崎市と PR について取り組んでいるが、訴求するだけでは魅力が伝わらない。地域と一緒になって受け入れ態勢や情報の拡散についての課題を考えていきたい。
・犬山城のキャンペーンに関わってきた経緯があるが、毎年地道にキャンペーンを行ってきた。ターゲットを名古屋地区に絞り、年配の方に喜んでいただけるような仕掛けを作り、電車で移動しやすくした。登閣者数は毎年右肩上がりになっている。
・本質を明確に伝え、魅力を発信していくことが重要である。岡崎市には色々な資源がある中で、ターゲットを絞ることも重要ではないかと感じている。

（委員長）
・観光産業都市を目指すためには、産業側が富を作り出さなければならない。カクキュー八丁味噌は観光関連産業の中でご活躍であると思うが、Ｆ委員はいかがか。
（Ｆ委員）
・岡崎市というよりも八丁味噌として名前が売れている。来訪したお客様が会社の小ささに驚かれることもあるが、そこをうまく活用していただきたいと思う。
・八丁味噌だけでは旅行会社に売ることができない。岡崎市の様々な施設で岡崎まぜめんや郷土の料理、花火などを楽しみながら 1 日を過ごすといった形の方が売れるのではないか。
・祭りなどをうまく活用し、売り方を工夫することで訴求できるのではないか。地元・地域だけが楽しむのはもったい。夜は観光客向けのプランを設け、団体客を呼び込むことが大切である。そのためのきっかけは、祭りからでも良いのではないか。
・皆様とどう連携するかが今後重要であると考えている。

（委員長）
・Ｇ委員、Ｅ委員、Ｆ委員の発言の中で出てきた「観光バス」、「旅行会社」、「団体」というキーワードが繋がっていくのを感じた。旅行市場の 7 割が、5 人以下の形態で行動している。募集型の会員制は大きく減少しているので、旅行商品の流通対策はこれから先もしっかりやっていくべきとのご指摘であると思う。
・一方で、個人客に対してどのようにアプローチしていくべきかというところがなかなか見えないという点も、浮かび上がってきているように思う。
・観光関連産業を含め色々な事業者様とのお付き合いもあるかと思うが、そうした状況を含めて、岡崎信用金庫のＣ委員よりご発言いただきたい。
（Ｃ委員）
・昨年の 6 月に、地方創生の一環で地域振興部を立ち上げた。この地区はものづくり企業が多く、観光産業に頼らずとも食べていくことができている。その点が、観光産業があまり進まない 1 つの要因ではないかと感じている。

・松應寺のにぎわい横丁などは、非常に魅力的な町だが、そういった所が点在してしまっている。岡崎城に観光バスで来て、八丁味噌に寄り、そのまま帰ってしまうのではなく、リブラの前を通り松應寺まで足を延ばしたいと思える雰囲気の街並みができれば、伊勢神宮に近いものができるのではないかと感じた。
・地元の方とお話をしながら、潜在的な能力は大きいものがあると感じているし、我々は観光産業として儲けていただきたいと思っている。

（委員長）
・地方創生と観光の関わりを議論する自治体が増えている中でも、特に印象深いのが、神戸市長の「訪問回数が増えるほど『住んでみたい』『暮らしてみたい』という言葉が出てきた」というコメントである。住んでいる人の日常が見えたり、経験や体験をしてもらい憧れを作ったりすることが必要ではないか。
・Ｃ委員の発言にあったように、歴史の関係を地元の皆様方にもっと知っていただかなければならないのかもしれない。
・Ａ委員はまち・ひと・しごとの絡みで議論されることもあるかと思うが、感じていることがあればお聞かせいただきたい。
（Ａ委員）
・資源がたくさんあり、全てを売り出すという訳にはいかない。誰に何を売るのかということを明確にしないと整理がつかないのではないか。
・首都圏から転勤で岡崎に来る際、岡崎は田舎のイメージがあり買い物等での不便を心配するが、実際は住みやすいという話がある。トヨタ自動車の役員も好んで岡崎に住んでいるように、非常に住みやすい街である。ものづくりで裕福な町ということも有り、観光には意欲的でない。
・昨年、家康公顕彰 400 年祭が行われたが、誰に何をというのがはっきりしていないと、祭が終わっても「あの時は賑わった」で終わってしまう。
・何を売っていくのかということを重視し議論していくべきではないかと考えている。

（委員長）
・降って湧いてくるような予算があれば何をしても良いが、今はそのような時代ではない。集中するべきものは何かという議論をすべきとのご意見であったと思う。誰にどのような価値をどうやって提供していくのかという、岡崎観光のビジネスモデルを作る必要があると感じた。
・ものづくりの町だとお伺いしたが、農業の方でも色々な取組があるのではないかと思うが、Ｂ委員はいかがか。
（Ｂ委員）
・農業は皆様が思っているほど儲かっておらず、非常に高齢化が進んでいる。その中で、岡崎市と一緒に考えているのは、いちご狩りのできる観光農園である。新規就労者の育成や技術支援なども考えている。

・岡崎市には、いちご、なす、法性寺ねぎ等がある。ただし法性寺ねぎは儲からないため生産者が減少している。岡崎地区で何とかなっているのが、いちごとなすであり、いちご狩り園を観光としてやっていくことができないかと考えている。
・自身としては、額田地区の方で耕作放棄地がたくさん出ているので、宿泊農業体験付きのロッジがあるとよいのではないかと思っている。また、観光農園などもできないかということも考えている。

（委員長）
・飯田市周辺の農家で修学旅行の農業体験の受付をしており、1 人 2 千 3 百円で 100 人が集まった場合、23 万円となる。DMO のような旅行会社に 10%、送客してきた旅行会社に 10%を支払うと、80%の 18 万 4 千円が残ることになる。対して、水田 1 反で 10 俵の米ができるが、JA に買い取ってもらうと、だいたい 12 万円弱とのことであった。春から秋まで頑張って 12 万円程度だが、1 日農業体験指導を行うだけで 18 万 4 千円の収入になる。こうした経済価値の作り方が農業と観光の中にあると思われる。
・名古屋の小学生を受け入れた時に、泣いて帰りたくないという子もいて、夏休みは家族を連れて訪れることもあるという。集落の人数も減少し秋には最後の運動会があるので、もう一度秋に来るとよいと勧めたところ、父親が企業の労働組合員を連れてくるので準備と後片付けをやらせてほしいという話になり、運動会は現在も継続されているというエピソードがある。
・観光は、経済的・社会的価値を生み出すので、やり方によって色々とできるのではないか。額田地区の耕作放棄地における農業体験についても、知恵の出し方が必要であるように思う。
・そこで、Ｊ委員からお話をお聞かせいただきたい。

（Ｊ委員）
・岡崎市内でオムライス屋を営んでいる。食に関しては、ご当地グルメの岡崎まぜめんでは副会長を、家康プロジェクトではプロデューサーをやらせていただいている。今年度からは岡崎おもてなしキャラバン隊の実行委員長を務めている。
・観光客に食で楽しんでいただくためには、保健所の規制緩和が特に必要であると思っている。食の内容やサービスは、進化しなくてはならないが、形としては過去に戻ることも必要なのではないかと考えている。しかし、屋台や外で食事をするスタイルは、今の保健所では難しい。道路上で発泡スチロールに食材を入れて、ビールケースに座って食事をするというスタイルが岡崎では考えられない。考えられないことが実は楽しめる形である、というところを現実化したいと考えている。
・現在、盛り上げようとしているのが八丁味噌だが、そのまま食べることができる食材ではないため、加工技術が必要になる。我々は岡崎まぜめんや八丁味噌を使った料理を展開しており、飲食店同士の連携と努力が必要になってくるが、定休日も営業時間も、ジャンルも異なっており、点在してしまっている。

・夜の営業については、23 時にはほとんどが閉店して、宿泊客にとってはお得感がなくなってしまう。だからといって店を遅くまで開けていても、客がなければ意味がない。
・我々の飲食店は、大型バスを収容することができない。駐車場問題もあり、マイカーや特にレンタカーが増えれば、我々のお店まで回ってもらえるのではないかと感じており、食を通して盛り上げていきたいと考えている。

（委員長）
・スペインバスク地方のサンセバスチャンという町のことを思い出した。美食都市と言われ食で観光客を呼び寄せている町だが、世界で一番バルが集積している町でもある。
・飲食店が点在していることや夜の営業についてのご指摘については、どのような答えを出すかを考える必要がある。
・レンタカーについては各地で必要になっている。どのように大胆なことをやっていくとよいのかということや、岡崎市が規制緩和を求めていくなどの発想がないと現状では難しいと感じた。
・それではK委員よりご意見をお聞かせいただきたい。
（K委員）
・歴史好きな人は岡崎を知っているが、興味がない人はなかなか知る所ではない。
・岡崎には色々な大きい企業があるが、それらと取引のある海外からの客がニューグランドホテルに宿泊している。そういったターゲットにどうアピールできるかということも、海外向けの観光の生きる道なのではないか。
・岡崎市は教育の面でもレベルも高いが、例えば岡崎の音楽イベントで育った子供たちがジャズの街・岡崎に繋がっていない。市民の立場から見ると違う世界に見えてしまう。子どもたちが入っていければ、市民も巻き込んでイベントが上手く活かせるのではないかと感じている。
・岡崎歴史語り人もやっており、市内の観光地へ行くのだが、おもてなしのレベルが低いように感じる。日常の雑多の中に観光が入っているのを残念に感じている。

（委員長）
・子どももお客様である。佐賀県の唐津は夏休みの自由研究を漁師さんが一緒にやってくれるので、母親が子どもをたくさん連れてきてくれるようだ。
・議題２においてお話いただくことになるが、H委員からも恐縮ながら手短にご意見をお聞かせいただきたい。
（H委員）
・「岡崎町育てセンター・りた」という NPO 活動を通じて、市民活動や地域の活動を応援している。観光アクションプランの中で掲げられているが、誰がするのかが不明確であると感じている。「誰が」を明確にする作業の手伝いを通じて、行政の計画を「自分ごと」にするためのきっかけ作りをしていききたい。
・5 年程前から松本町、松應寺横丁というところで空き家を利用したまちおこしを始め

た。観光のコンテンツとしては種があると感じているが、多くの客が木造アーケードやレトロな街並みの写真を撮るのに対しＰＲしているのは本堂であったりと、ニーズとＰＲがずれているのではないかと感じている。
・100 周年の補助金をいただき、広報強化やコンテンツ強化、おもてなし強化を行なったが、まだまだできることがあるように思っているので、それぞれのやる気と、事業者との連携をつないでいきたいと思っている。

（委員長）
・皆様方の話を受けて、議題１のアクションプランの策定に向けては、事務局が取りまとめていただいたもので進めさせていただきたい。異議はないか。
（委員全員）
・異議なし。
（委員長）
・Ａ委員からも話があったように、観光セクションがやるべき内容と、本来他のセクションがやるべき内容とが混在しているのではないか。アクションプランの場合は、観光課がやることを重要施策として整理すれば、今までの意見に沿うのではないかと感じる。他課が主体的となるものは庁内調整などをしっかり行ない、観光セクションの意見を具体的に伝えていただきたい。二次交通については、観光よりも本来は交通関係のセクションの問題であるが、どの自治体でも抱えている課題なので、しっかりと意見を伝え、調整を進めていただくことが必要である。
・重要指標を行政だけ実施できるとは思えないため、民間には何をやってもらいたいのかをきちんと伝えていただきたい。その擦り合わせを最後にできる形にしていただければ良いのではないかと思う。
・集中の中には、歴史的なキーワードを外してはいけないということがわかった。額田地域など広い範囲の中で何ができるかも重要である。
・以上のことを踏まえて、誰がやるのかを明らかにしながら、取りまとめをしていただきたい。

（２）民間活力の活用について
（委員長）
・続いて、民間活力の活用について事務局よりご案内いただきたい。
（事務局）
【事務局説明】
（Ｈ委員）
・乙川リバーフロント地区整備に関する市民や事業者との関わっている立場から、簡単にご説明させていただく。
・市長が公約に掲げた、乙川リバーフロントを岡崎の新しい魅力の１つとして開発して

いく政策である。国交省の支援を受けながら、平成 25・26 年度にかけてハード整備が計画された。

・東岡崎駅と岡崎城の間を流れる乙川の堤防道路や道の整備を行ない、中心市街地である康生町とを繋ぐための新しい動線として、岡崎人道橋や岡崎セントラルアベニューという軸線を通し、その先にある籠田公園までを含めて新しい南北軸を作っていこうというものである。

・平成 26 年度は東岡崎―岡崎城間の船での行き来や周遊ができるよう整備を行い、その整備を踏まえて街自体にどのようなコンテンツを作っていくべきかを平成 27 年度に議論した。

・行政、市民、専門家で検討を行ない、「かわまちづくり」「にぎわい創出」「歴史・観光まちづくり」「人道橋・中央緑道・籠田公園の利活用方法の検討」といった 4 つのテーマを設定した。

・「かわまちづくり」について、河川の活用には国交省による強い規制がかかっていたのだが、規制緩和によってまちづくりに活かす社会実験から始まっている。

・「にぎわい創出」について、駅と街が離れていて動線に難しい点があることが岡崎の課題となっていたため、ストリートマルシェを計画している。

・「歴史・観光まちづくり」について、多くのコンテンツがある反面、なかなか参加できるプログラムがないという指摘があり、参加しやすいプログラム作りを考えている。

・「人道橋・中央緑道・籠田公園の利用方法の検討」については、600mの距離を人に歩いてもらえるような、空き店舗を活用したコンテンツ作りなど考えている。

・市民提案事業一覧には連携事業を記載している。乙川リバーフロント関係のみならず、他の部署が行なっている事業とも密に連携を取るために関連事業を記載した資料である。街に来た人は川へ、川へ来た人は街へ行っていただくというような連携を取ることを考えている。

・愛知トリエンナーレの連携事業としては、セントラルアベニューに木造構造物を建て、展示スペースとして利用したり、時には宿泊もできるというようなものを建てられないかということを民間で検討している。

・籠田公園の周辺には空き店舗・ビル・家がある。六供地区には古い建物や路地が非常に多く、それらをリノベーションし、カフェや宿泊施設を入れるなど、この地域に小さな民間投資による小さなコンテンツを集積させ、足を運んでもらえるようにしたいと考えている。現在既に 7、8 件が動いている。

・コンテンツが点在しており、いかに定常的に人に来ていただけるようにするかが課題となっている。

・乙川ワンダーランドについては、課題を解決するための社会実験として行なう。今年 7 月 19 日から 9 月 14 日の間に、市民・事業者・団体・NPO 等で川を使ったプログラムを公募をしている。

・今まで行政でないとできなかった店の出店や、ライブ・コンサートもでき、水上でも遊ぶことができる。30 店舗程度の参加を予定している。どのようなプログラムであれ

ば市民で回せるのか、事業者に利益がもたらされるのかなど、内容やプログラムを検証していく予定である。
・コンテンツを集約してイベント的に賑わいを作る期間を 8 月 21 日から 28 日の一週間に設定し、乙川が利用できるという PR 効果を狙いながら、催しを開催したいと考えている。来年度以降はこれを踏まえ、定常的にできるような土壌づくりを行ないたい。
・今回は川であったが、歴史・食・お土産についても、行政が整備したところに、民間が参入し、お互いに相乗効果を作れるようにしていきたいと考えている。
・NPO で活動しており PR が足りないのだが、委員各位の力をお借りして盛上げていきたい。

（委員長）
・大きな事業をきっかけに、民間同士の連携や地域の一体感が生まれるということに繋がると良い。民間同士でどのような連携ができるか、地域や市民は何をするべきか、賑わいが創出されるためにはどのような手段や推進体制が必要であるのかなど、自由なご意見を伺いたい。D委員はいかがか。
（D委員）
・犬山の事例は、自治体が観光都市として指標となる犬山城が下降気味になった時にどうしたらよいかを本当に真剣に考えた結果、民間と自治体と我々交通事業者が一体となって取り組んだものである。商工やまちづくり整備の一環として電柱を地中化するなど、観光だけでは動かなかったものを市が全体的に動いて、我々も一緒に取り組ませていただいた。
・犬山も、初めはきれいな画を使った宣伝 PR だけであり、中身の伴っていないものだった。そこに中身が伴って来るとお客様が少しずつ興味を示され、拡がって良いスパイラルになったと考えている。
・これは、それぞれが自分の役割を果たしながら一体となって動くことの重要性を示している。例えば、名鉄であればお客様を目的地に輸送することしかできなかったのだが、その先の目的地をつくり、官民一体となって動いたことで、利用の幅が広がったと思っている。
・岡崎は、名古屋からどのように人を引っ張ってくるかが課題である。実際に名古屋の人がどれだけ岡崎に来ているかを考えると、極わずかだと思われる。
・岡崎城という立派なお城があるが、登閣人数は 20 万人程度であり、これでよいのかということを真剣に考える必要がある。夏祭りの花火の日には多くの観光客が来るが、普段からもう少し観光客が来る町になる方法はいくらでもあると思われる。
・行政だけではできないことを、民間が一緒に協力して連携していくことが一番重要だと感じている。
・もう一つ、乙川リバーフロント計画については知っていたが、そこを使って何をするのかを、この会議で初めて知った。乙川のプロジェクトの話もそうだが、皆で情報共有することで何かが生まれる可能性が非常に高いと思っている。

（委員長）
・何か他に連携できるようなことがあるかどうかについて、Ｊ委員はいかがか。
（Ｊ委員）
・来訪者に直接喜んでいただけるものは食である。正確な情報があれば、いかなる形にも対応ができると考えている。

（委員長）
・Ｋ委員は、子どもたちの関係を含めたプロジェクトを行なっていると思うが、何らかの連携は可能か。
（Ｋ委員）
・岡崎は観光地が点在しており行きにくいという印象があるが、それを逆手に取り、点在しているからこそ各観光地間を子どもたちが行き来するような形ができると良い。

（委員長）
・Ｇ委員はいかがか。
（Ｇ委員）
・聞くところによると、能見神明宮大祭でも、地元の子どもは育ってしまって引手はほとんどが他の町の子どもだという。
・二七市通りでは、二と七の付く日に歩行者天国になり、魚屋や八百屋が出てコミュニケーションが生まれる非常に良い市であったのだが、昨今は人出も賑わいも少なくなってしまっている。混雑時は駐車場が無く路上駐車が多い。観光資源として伸ばして行きながら地元の理解を考えていくことも課題ではないかと感じている。

（委員長）
・議題の民間活力の活用については、乙川リバーフロント関係の事例についてであったが、今後色々な連携のあり方について議論を進めていきたい。
・異議が無ければ、議題２で出た意見については、一旦事務局で集約し第２回以降の会議で示しながら進めたい。
（委員全員）
・異議なし。

８　その他
（１）今後のスケジュール
【事務局説明】
（２）第２回岡崎市観光基本計画推進委員会の日程
・第２回の日程は、７月７日午前中とする。

以上